

荒このみ著

## 『黒人のアメリカ』

## ―誕生の物語―

筑摩書房

西永良成

前著『西への衝動』にひきつづき、今度の『黒人のアメリカ』も大変面白く、一気に読んだ。荒さんのアメリカ論の魅力は、できるだけ接続詞をつかわずに、短いセンテンスを畳みかけ、およそ淀みというものが無い軽快な文体にある。また意外な展開やサスペンスを用意しながら、現在と過去、歴史と文学といった異なった時空間、領域を自在に往来する論述の巧みさにある。

南北戦争の結果、奴隷制度が廃止されたのに、なぜ大多数の黒人たちがアメリカ市民ではなく、「アメリカの黒人」としてとどまらねばならなかったのか。そして、なぜこの状況が現在もなお潜在し、ときとしてロサンゼルス暴動、あるいはO・J・シン普森裁判といった形で顕在化するのだろうか。このよう

な問いが本書の出発点にある。本書は一八五二年に出版されたハリエット・B・ストウ夫人のあまりにも有名な『アンクル・トムの小屋』の再読、再解釈によってこの問いへの答えを多角的に提示する。私にしてもそうだが、多くの読者はこの人道主義の「名作」を児童向けにライトされた物語として読み、感動してきたのだが、この小説に描かれる黒人像は、実際はキリスト教徒の白人にとつてきわめて都合がよく、人畜無害でひたすら受動的であり、たんに不幸な身の上に同情してやれば充分な黒人像でしかない。いわば「オリエンタリズム」化された黒人像にほかならず、この小説は白人のキリスト教徒の読者にとつてのみ「名作」であるにすぎないのだ。

ストウ夫人の黒人の表象の恣意性、一面性は彼女のベストセラー小説に反発、もしくは触発されて書かれた同時代の黒人作家たちの自己表象と対比してみればすぐにわかる。こうして私たちは、マーティン・R・デレイニーの小説『ブレイク』またはアメリカの小屋』の知的な黒人像、フレデリック・ダグラスの小説『勇敢な奴隷』の英雄的な黒人像などを知らされる。これだけでも充分にストウ夫人の黒人像の歴史的・イデオロギイ的な限界や無意識的な作為が明らかになる。しかし

男にとつて女はつねに「テラ・インコグニータ（見知らぬ土地）」だと考えている著者はさらに、スレイヴ・ナラティブの傑作である女性の黒人作家ハリエット・A・ジェイコブズの『奴隷の少女の人生に出来事』を論じることで、労働の搾取のみならず性の搾取まで受ける黒人女性の二重の不条理をもの確に明るみに出す。そしてここまでくると、ストウ夫人のみならず、アメリカの大多数の白人の歴史的な欺瞞性にまつた可疑の余地はなくなり、この欺瞞性がいかに現在のアメリカ社会の癒しえぬトラウマになっているかが、おのずから納得できる仕掛けになっている。

人類史上類例のない国家形成をおこない、今日人類の未来すら左右するほど、人類史上最大の強国であるアメリカ社会の問題には、私たちも知的な興味だけでなく、実存的な関心さえ払わざるをえない。それにしてもユニークなアメリカ論でもある本書を読みながら感じるのは、近年流行の「多文化主義」や「共生」といった言葉の無邪気さ、あるいは厚かましさのことである。